

英語科研究プロジェクト

コミュニケーション能力の評価
—— 評価法の改善をめざして(3) ——

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

谷口 幸夫・加藤 裕司・久保野雅史
鈴木 文子・寺田 恵一・八宮 孝夫
平原 麻子

コミュニケーション能力の評価

——評価法の改善をめざして（３）——

（３年計画最終年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

谷口 幸夫・加藤 裕司・久保野雅史

鈴木 文子・寺田 恵一・八宮 孝夫

平原 麻子

目 次（執筆担当者）

1 はじめに（久保野雅史）	156
2 スピーキング能力の評価（久保野雅史）	156
2.1. スピーキング能力とは	156
2.2. スピーキングの指導	159
2.3. スピーキング能力の評価	162
3 スピーキング活動の実践と評価	164
3.1. 中学１年生（加藤 裕司）	164
3.2. 中学２年生（八宮 孝夫）	166
3.3. 中学３年生（久保野雅史）	170
3.4. 英語Ⅰ（鈴木 文子）	178
3.5. オーラル・コミュニケーションＢ（谷口 幸夫）	183
3.6. 英語Ⅱ（寺田 恵一）	188
4 おわりに（平原 麻子）	194

1 はじめに

本校英語科では1995年度から3年計画で「コミュニケーション能力の評価－評価法の改善をめざして－」をテーマに実践・研究を重ねてきた。過去2年間の研究経過は次の通りである。

1995年度（第1年次）…『研究報告 第36集』

- ・ テスティング・評価に関する文献研究。
- ・ 中学校「観点別学習状況評価」の実践報告。

1996年度（第2年次）…『研究報告 第37集』

- ・ 中高6年間を、基礎期（中学1，2年）・実践期（中学3年， 高校1年）・発展期（高校2，3年）の3期に分け，4技能別のシラバス試案の作成。
- ・ 4技能ごとに指導・評価の実践報告。

1997年度は本研究プロジェクトの最終年次に当たる。そこでコミュニケーション能力の評価の中で従来あまり実践されていない「スピーキング能力の評価」に本稿では焦点を絞り，1997年度の実践・研究を報告することにする。

続く第2章では「スピーキング能力」に関する従来の考え方やシラバス作成のガイドライン及び具体例をまとめる。これらを参考に本校の「スピーキング能力育成」6カ年シラバスに検討を加え，その概略を再度提案する。

第3章では，1997年度に行われた中学1年から高校2年までの各学年における指導と評価の実践を報告する。ただし，高校1年のオーラル・コミュニケーションBは例外的に1998年度の内容となっている。これは1997年度の担当者が転出したためである。

2 スピーキング能力の評価

2. 1. スピーキング能力とは

スピーキングの技能 (speaking skill) は4技能の中でも最も複雑なものであると言われる。発話 (utterance) を行うためには，先ず，話者の頭の中で伝達すべき内容が意図される。次いでそれは言語として発せられるために記号化 (encoding) され，調音器官の運動によって音声として表出される。しかし，通常の場合，話し手の注意はその意図された伝達内容 (content) に向けられ，その言語の形式 (form) に直接向けられることはない。意味内容の記号化そして音声化は，無意識下で自動的 (automatic) にまた瞬時に行われるプロセスである。

さらに話し手は自らの発話を行う一方で，聞き手の反応や場面等にも注意を払わなければならない。外国語学習者にとって，これは非常に困難な活動である。このように，スピーキング活動には様々の要因が働いている。

それでは、中学校・高等学校の『学習指導要領』は、スピーキング能力（「話すこと」の言語活動）についてどのように定義しているのでしょうか。関連箇所の記述を以下に抜粋する。「話すこと」を、「言う（＝音声化する）」「応答する・問答する」「話す」の3つに大別して捉えていることが伺える。ここでは、下線を付けて3つの活動の差別化を図った。

また、久保野他（1998）で主張したように「話すこと」の言語活動には「音読」も含まれると考えられるが、その部分の引用はここでは省略する。

<中学校>

・第1学年

- ア 語句や文をはっきりと正しく言うこと。
- イ あいさつ・質問・指示・依頼などに適切に応答すること。
- ウ 伝えようとすることを簡単な文で話すこと。

・第2学年

- ア 相手の言うことを聞き取って適切に質問したり応答したりすること。
- イ 聞いたり読んだりしたことについて問答すること。

・第3学年

- ア 話そうとすることを整理して、大事なことを落とさないように話すこと。

<高等学校>

・英語Ⅰ／Ⅱ

- ア 聞いた内容について、場面や目的に応じて問答すること。
- イ 読んだ内容について、自分の考えなどを話すこと。
- ウ 話そうとする内容を整理して、大事なことを落とさないように話すこと。

・オーラル・コミュニケーションA

- イ 平易な表現で自分の考えなどを相手に話すこと。
- ウ 身近な事柄について場面や目的にふさわしい表現で話し合うこと。

・オーラル・コミュニケーションB

- ウ 聞き取った内容について、自分の考えなどを整理して話すこと。

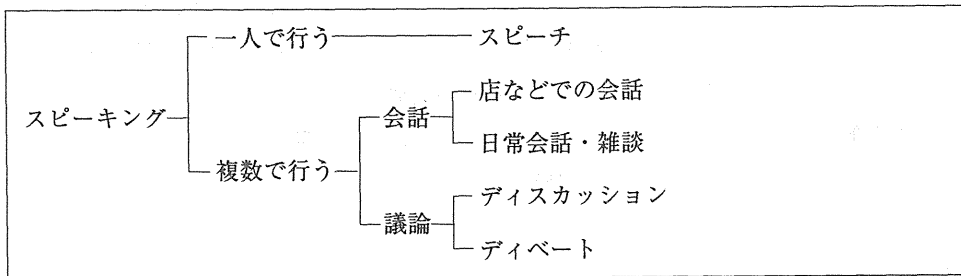
・オーラル・コミュニケーションC

- イ 相手の意向などを理解し、適切に応じること。
- ウ 話し合いの場面や目的に応じ、自分の考えなどを積極的に表現すること。

・リーディング

- ウ 内容を読み取って、それについて自分の考えなどを話したり、書いたりすること。

また、吉田（1998）は、スピーキングを次のように分類している。



この分類に従うと、スピーキング活動は先ず「一人で行う」活動と「複数で行う」活動に区別できる。自分の「考え」を表現することが目的となる前者のようなスピーキング活動と、相手が言ったことを先ず理解しその上で受け答えることが要求される後者のようなスピーキング活動とでは、要求される能力に当然違いが出る。また、「複数で行う」活動は、①買い物・電話のように「定型的な応答パターン」で大体間に合う会話、②定型のない日常会話・雑談、③論理的な話の組み立てが必要となるディスカッション・ディベートに分けて考えるべきである。

教育課程審議会（1998）は、「言語を使用する場面や言語のはたらきに考慮」し「実際に使用する経験を重ねながら習熟を図る」ことの重要性を指摘している。この最終答申ではスピーキング活動をどのように捉えられているのだろうか。例示された「あいさつや依頼」だけが強調されがちだが、ごく一部の言語活動例だけを取り上げてその是非を論ずるのは適当ではあるまい。答申は、場面を限定した定型的な応答パターンの暗記・再生に習熟することのだけを要求しているのではない。また、それだけで「自分の考えなど」を整理して話す力が伸びるはずだ、と述べてもいない。答申では、具体的な活動の提案までは為されていないが、上述のスピーキング活動が全て対話の応答練習の延長線上にあると考えるには無理がある。そこで、スピーキング活動を下位区分し、各活動に応じた指導シラバスを作成することが必要となる。

試みに、Department for Education and Welsh Office（1995）や Council of Europe（1998）を参考に、言語の「はたらき（function）」という観点からスピーキング活動を分類してみた。前者は技能別に具体的な行動目標が明記されている点で、後者は指導すべき表現のサンプルが豊富に含まれている点で、シラバス作成には欠かせない資料である。

スピーキング活動を分類し、易から難へ配列すると次のようになる。

- ①単語や語句を言うことができる。
- ②簡単な挨拶ができる。
- ③自己紹介（自分、家族など）ができる。
- ④日常生活（家庭、学校など）が説明できる。
- ⑤日常会話（天候、感謝など）ができる。

- ⑥身の回りの品物や事物を説明できる。
- ⑦好き嫌いなどの気持ちを表現できる。
- ⑧拒否したり，要求したりできる。
- ⑨過去や未来の事柄を述べることができる。
- ⑩自分の意見を述べ，その理由を説明できる。
- ⑪スピーチができる。
- ⑫ディベートやディスカッションができる。

これで全ての活動が網羅されているわけではないが，2. 2. ではこのリストを基に本校のシラバス案を再度提案したい。

2. 2. スピーキングの指導

文部省（1992）は「話すこと」を評価する際の観点を，①話す活動に対する関心や意欲，②話す活動に関する技能，③話す活動に関する知識や理解度，の3つに分類している。本稿では，その中から②の技能面に焦点を当て，スピーキング能力育成の目標を「意図する内容を，場面に適した言語形式を用い，自然な音声で伝達する能力を習得させること」と捉え直してみたい。

この目標達成のための指導過程においては，学習者のレベルに応じて話題や語彙・文法事項等を用意深く精選した活動を準備する必要がある。例えば，小菅他（1996）では，中学校の教室で行われる言語活動を2つに分け，比較的基礎的な活動を「言語活動Ⅰ」，発展的な活動を「言語活動Ⅱ」と呼んでいる。「言語活動Ⅰ」は，各課で学習した文型・文法事項の定着を図るための一般的な言語活動を指す。「言語活動Ⅱ」では，発展的な言語活動が，中学校の3年間を見通して無理なく配列されている。また，各学期に1回，準備に比較的時間のかかる大きな言語活動が設定されている。そのうち，スピーキング能力に関する部分を抜粋する（一部省略）。

<中学1年生>

- ・ 1学期：My Favorite Picture と題して，自分の家族や友人を写真を見せながら紹介する。
- ・ 2学期：「電話での会話」をペアで作成し，スキットを演じる。
- ・ 3学期：自分の理想の部屋を書き，英語で説明する。

<中学2年生>

- ・ 1学期：過去のことについて問答するスキットを作成し演ずる。
夏休みの予定についてALTのインタビューを受ける。
- ・ 2学期：道案内・招待・約束等の設定で，ALTと即興で対話を行う。
興味のあることについて，Show and Tell を行う。
- ・ 3学期：教科書の題材について資料等を参考に自分の言葉で Story Telling を行う

<中学3年生>

- ・ 1 学期：過去の経験について，即興で話を続ける。
有名な場所・建物の写真について説明しながら，友達と対話する。
- ・ 2 学期：ニュースを作り，キャスター・レポーターになりカメラの前で発表する。
- ・ 3 学期：環境問題について，お互いの意見を交換する。

また，石井他（1997）の「創造的な言語活動の年間指導計画への位置づけ」では，中学校3年間を見通して言語活動を整理したシラバスが提案されている。*は投げ込み的活動，**はやや長い時間をかけて準備する大きな活動を示している。

<中学1年生>

- ・ 前期：・こちらは～さんです…友人を紹介するスキットを演じる。
 - ・ 自己紹介…名前や好きなこと
 - ・ 質問を作ろう…登場人物の立場で質問を作り問答する。
 - ・ 英語でショッピング…買い物のスキットを作り演じる。
 - ・ 休みの予定は？…休日についての対話を作り演じる。
- ・ 後期：*NHKスキットコンテスト…課題スキットを演じる。
自由スキットを創作し演じる。
 - ・ 私の友達こんな人…友人や家族について話す。
 - ・ 教科書から劇をつくろう…ストーリーを劇仕立てにして演じる。
 - ・ インタビューウィーク…昨日のことを友人や教師にインタビューする。

<中学2年生>

- ・ 前期：**Show and Tell①
 - ・ 入国審査を通ろう…ペアで対話を演じる。
- ・ **Show and Tell②
 - ・ 宇宙人と話をしよう…ペアでスキットを創作して演じる。
 - ・ *NHKスキットコンテスト…課題スキットを演じる。
自由スキットを創作し演じる。
- ・ 後期：**Show and Tell③…発表後にグループで問答合戦を行う。
 - ・ 英語劇をグループで演じよう。
 - ・ 環境問題についてレポートしよう…グループで調べて発表する。

<中学3年生>

- ・ 前期：・ 有名人に直撃インタビュー…有名人になったつもりで人生を語る。
*NHKスキットコンテスト…課題スキットを演じる。

自由スキットを創作し演じる。

・後期：**Communicative Activity…道案内・電話等の場面で情報を交換する。

自分の意見を述べたり，討論したりする。

・私の好きな音楽…世代の異なる3人が音楽に対する価値観の違いを
ぶつけ合うスキットを演じる。

・ディスカッション…教科書の形式に従って討議する。

*名演説・名台詞を暗唱しよう

以上2校の実践を参考にしつつ，本校では「中高一貫教育」という特色を活かした独自のシラバスを構築する必要がある。そこで，久保野他（1996）で暫定的に提案した「スピーキング能力育成のシラバス」試案に再検討を加えることとした。暫定シラバスは以下の通りである。

＜基礎期＞ 中学1，2年

- ・個々の発音・連音・リズム・イントネーション（基本）
- ・綴りと発音の関係（フォニックス）
- ・絵や物をヒントにした oral reproduction (Show and Tell, Story Telling)
- ・身近なことがらを英語で説明（自己紹介など）

＜実践期＞ 中学3年，高校1年

- ・リズム・イントネーションの効果的な使い方（応用）
- ・様々な形式による口頭発表（Recitation, Speech, Skit）
- ・より内容のある事柄を英語で伝える（体験談，興味のあることの説明など）

＜発展期＞ 高校2，3年

- ・より高度な内容を英語で伝える
- ・自分の考えが相手に正確に伝えられる
- ・意見交換ができる（Discussion, Debate）

ここで例示された様々な言語活動を3つに大別し，活動相互の関連と学習者の発達段階を考慮して6年間に位置付け直した。その概略を以下に再提案する。（久保野・谷口 1998）

中学校			高等学校		
1年	2年	3年	1年	2年	3年
スキット → ロール・プレイ					
音読・レシテーション → スピーチ					
			ディスカッション&ディベート		

ここでの「スキット」は、あらかじめ準備した対話を暗記し正確に再現する活動である。従って、相手の言うことを聞いてそれに応じて自分の発話を変える必要はない。一方「ロール・プレイ」は文字通り与えられた役割になりきり状況や相手の発言に即興的に対応するもので実際のコミュニケーション活動により近づいたものだと考えられる。Livingstone (1983) はスキットを次のように定義している。

Role play is therefore a classroom activity which gives the student the opportunity to practise the language, the aspects of role behaviour, and actual roles he may need outside the classroom.

また久保野 (1998a) で指摘したように、スピーキング能力育成の基礎・基本として「音読・レシテーション指導」を重視しようと考えた。「意味を音声化する」システムを学習者が体得するためには、この活動が絶対に有効だと考えてのことである。

それでは、以上の骨格に各言語活動をどのように肉付けすれば良いだろうか。この具体例はまだ確定できていない。現在はまだ、各学年で現在行われているスピーキング指導を洗い出し、6年間を見通して配置する作業の途中である。従って、第3章で各学年から報告される評価は上記のシラバス改訂案と一部整合性を欠く部分もある。その点をあらかじめお断りしておく。

2. 3. スピーキング能力の評価

スピーキング能力の測定・評価は、実施が難しいため従来敬遠されて来た。しかし、これでは

テストしない → 勉強しない → できるようにならない

という「マイナス」の波及効果 (backwash effect) を生み出しかねない。仮に「聞く・話す」を重視した授業を行ったとしても、そこで身につけた能力を評価する機会がなければ、学習意欲は維持しにくい。例えば、授業中に真面目に口頭練習をしていた生徒が、テストで全く結果を出せなかったとする。その場合の責任はどこにあるのだろうか。従来、生徒の不勉強が原因だと考えがちであった。しかし、テスト自体が妥当であった保証はどこにもない。また、音声面の技能を筆記試験で図ろうとすること自体が、本質的に無理なことである。

それでは、スピーキング能力の評価方法はどのようなものがあるのだろうか。代表的なものは、①授業観察記録法、②面接法、③録音法等の3つである。このような方法で、能力を直接測ることの妥当性 (validity) には議論の余地がないだろう。しかし、テスト結果の信頼性 (reliability) を問題視する考え方もあろう。確かに、スピーキング能力のテストは評価基準が立てにくく、採点が主観的になる傾向が否めない。一般に「評価の妥当性と信頼性は反比例する」とされ、妥当

性を高めようとする信頼性は低下する、と言われている。しかし、信頼性には少々目をつぶっても、敢えてテストを実施することを強く主張したい。

ただし、実施に当たっては実用性（practicality）の問題を無視する訳にはいかない。このようなテストは、筆記テストと比較して実施や採点に膨大な時間や労力が必要だと考えられるからである。ただこの問題は、実施形態等を工夫することでかなりの部分が解消可能である。また、このような実技テスト導入の最大のメリットは、学習者に対する「プラス」の波及効果である。実技テストを導入するということは「授業中のスピーキング活動の目標を明確に示す」ということに他ならない。「今学期末までに英語を使って〇〇ができるようになろう」という行動目標を示すことによって、発音・音読練習のように単調な訓練的活動に対しても目的意識を持って積極的に取り組みことが期待できるようになる。このような点から考えると、スピーキング能力のテストは体育や音楽のような実技系教科のテストと極めて似通っている、と言えるだろう。

このようなテストは、学習者に優劣の差を付けることを相対評価、即ち集団標準準拠テスト（norm-referenced test）であってはならない。「鉄棒で蹴上がりができるか」「リコーダーで課題曲が演奏できるか」のように外的に定められた目標基準（criterion）に到達できたか否かを判断するのであれば、絶対評価である目標基準準拠テスト（criterion-referenced test）を採用すべきであろう。このようなテストでは、全員が一生懸命努力して目標基準に到達してしまうと「差がつかない」と批判する立場もあろう。しかし「差がつくこと」が授業の目標であろうか。そうでない以上、「差がつかない」という結果はむしろ喜ぶべきものだと考えるべきである。

評価（assessment）については、梶田（1987）のように、①到達目標の意識、②評価の基準、③評価者の点から分類すると整理しやすい。

「評価基準および評価者の点から見た教育評価の類型」

到達目標の意識		有 り	有 り	無 し	無 し
評価の基準		外的客観的 目標・基準	評価者の内的 目的・基準	集団内の他者	当人の過去の実績
評 価 者	教 師	目標到達度の 評価 ＜絶対評価Ⅰ＞	内的基準満足度の 評価 ＜絶対評価Ⅱ＞	優劣度の評価 ＜相対評価＞	進捗度の評価 ＜個人内評価＞
	学習者自身	目標到達度の 自己評価 →（未）達成感	内的基準満足度の 自己評価 →（不）満足感	優劣度の 自己評価 →優劣感	進捗度の 自己評価 →進歩・停滞感

スピーキングの実技テスト、即ち目標基準準拠評価はこの表では＜絶対評価Ⅰ＞に分類されよう。従って、評価活動に入る前に評価尺度の説明文（description）を作成し公開することにより、行動目標・努力目標を事前に周知徹底しておくことが必要となろう。

3. スピーキング活動の実践と評価

3. 1. 中学1年生 (51期)

3. 1. 1. 中学1年生におけるスピーキングの到達目標とその根拠

中学1年のスピーキングの目標としては、なんと言っても、簡単な内容が相手に伝えられるように、正確な発音・適切なイントネーションで発話できることである。指導要領に中学1年の目標として「簡単な事柄を聞いたり話したりすることができるようにさせる」ことが挙げられているが、この目標にも合致している。

3. 1. 2. 中学1年の授業構成

中学1年のスピーキング指導について報告する前に、中学1年の授業構成について述べておきたい。授業構成は以下の通りである。

加藤	教科書	<i>New Crown English Series 1</i> (三省堂)	2 時間
	副読本	<i>The Adventures of Sherlock Holmes</i> (桐原書店)	
	ALTとのティームティーチング		1 時間
矢野	発音指導 (発音記号, フォニックス), ペンマンシップ		
	会話表現など		1 時間
尾崎	LL教室でのリスニングを中心とした授業。		
	教材	<i>Listen First</i> (Oxford University Press)	
	「今月の歌」の指導など		1 時間

3. 1. 3. スピーキング指導の実際

スピーキング指導は、教科書の中の SOUND というセクションで正面切って指導する以外は、日常的に指導し続けているものである。例えば、生徒に教科書を読ませれば、発音や読み方については必ず指導することになる。しかし、少しでもネイティブ・スピーカーの発音に近づけたらという願いから、比較的高度な発音指導も行ったということだけを述べておきたい。

教科書付属のテープは、以前よりはだいぶ自然な英語に近い読み方で発音されている。生徒に同じような発音をさせるためには、中学校ではあまりなされていないであろうような発音指導も必要であった。具体的には以下のようなものである。

まずは、発音記号である。最初のうちは指導せず、後になって、教科書の発音指導のセクション SOUND のところで扱われている発音の発音記号は指導した。読めればよいという程度の指導である。

次に、母音の長さについての指導である。母音の長さは後に続く音によって長さが変わるが次

のようなことを簡単にふれた。

母音 + φ > 母音 + 有声音の子音 > 母音 + 無声音の子音

この他、語頭の破裂音の aspiration ([t] [p] などの破裂音のあとに [h] に似た音をつけて発音すること) や r-linking (“far away” など [r] のあとにくる母音が [r] とくっついて発音されること)、基本的な音変化についても簡単にふれた。例えば、強形・弱形の指導などである。これらの指導は、LLの授業で用いている教材 *Listen First* のテープが、かなり自然に近い速さで読まれるので、そLLの授業の補強をする目的もあった。

3. 1. 4. 教科書に沿った指導

本校で現在指導している教科書では、普通の Lesson の合間に以下のようなセクションがある。これらのセクションでは、会話を練習することになっているので、様々な状況に置ける発話の指導が、発音・イントネーションなどを含めて指導することができた。

Let's talk

1. 挨拶 How are you? など
2. お礼 Thank you. You're welcome.
3. もう1度いってもらいたいとき Pardon?
4. 曜日を聞くとき What day is it today?
5. 月日を聞くとき What's the date today?
6. 許可をもとめるとき Can I borrow it? Sure.
7. 電話で話すとき Hello. This is ~. Can I speak to ~?

Let's write

1. 自己紹介

この他にも、Try & Checkというセクションがあり、ここでは生徒が実際に発話したり、聞き取ったり、モデルの英文を参考にして書いたりする練習を行うことになっている。このようなセクションを利用して、生徒の発音・イントネーションなどスピーキングの指導を個別的な指導も含めて行うことができた。特に、「自己紹介」のところでは、本格的なスピーチを意識して、自分の原稿をあらかじめ準備させ、ALTの協力を得て行った。各自が教壇に立って自己紹介を行うわけだが、ALTには、スピーチの終わった後で、スピーチの内容について必ず簡単な質問を一つするようにお願いしておいた。生徒にとっては、その質問がプレッシャーになったようだが、楽しく自己紹介を聞くことができた。

3. 1. 5. スピーキング指導の評価

普段の授業で、どの生徒にも数時間に1回は教科書を朗読するチャンスを与えた。筆者の場合には、生徒を当てるたびに、手帳に印をつけておくことにしている。特に問題なく読めた場合に

は「・」のマークをつけて、指名したことを記録するだけだが、問題があった場合にはその内容をメモしておくことにしている。例えば、[i] の発音に問題があれば「i の発音」のようにメモしておく。しかし、最初のうちは、問題があっても、最終的にはマスターしていく。こちらの要求レベルはほとんどの生徒がクリアーしていくので、大部分の生徒についてはAがついた。

これとは別に、スピーチの指導として、自己紹介をさせたが、これについては、「言いたい内容が相手につたわるか」、「正しい発音、イントネーションで発声できるか」を基準としてA、B、Cで大まかに評価した。この場合も、ほとんどの生徒は、こちらの要求レベルをクリアーした。

3. 2 中学2年生 (50期)

3. 2. 1. 中学2年生におけるスピーキングの到達目標とその根拠

学習指導要領によれば、第2学年の目標は「初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを話すことが出来るようにするとともに、英語で話すことに慣れ、英語で話そうとする意欲を育てる。」とある。50期生は中学1年次からの担当であり、1年の1学期から学期末に「パフォーマンステスト」と称する一種の show and tell 活動を行ってきた。その学期に学習した文法項目を用いて、あるものをクラスの前で英語で説明するというもので、例えば、好きな本を過去形を用いて「誰が書いたか、いつ書いたか、何についてか」などを紹介するのである。実際に実物を見せながら、というのがポイントで、これにより原稿を読むのではなく、視線を聞き手に向けながら、必要に応じて板書をしながら、自然な形でコミュニケーションを取ることを目標にしたものである（詳しくは久保野他1998参照）。

2年次も既出の文法項目や話題を中心にしながら、引き続きパフォーマンステストを行った。これは、次の2点により学習指導要領の目標とよく合致するものだからである：

- 1) 既出の文法項目を実際に発表として運用する機会を持つ。
- 2) クラスの仲間が様々な話題を英語で発表するのを聞くのは興味深く、自分でも英語で話そうとする意欲が高まる。

以下、2年次のパフォーマンステスト、その他のスピーキング活動及び評価について述べる。

3. 2. 2. 1学期

1年生の時はNHK『基礎英語1』（1995年版）を主に使用して授業を進めており、その紙面は基本的に（key words 以外は）英文はなく、状況を示すイラストがあるだけであった。その教材を oral introduction で導入し、繰り返させながら、最終的にはイラストを参考にしながら retelling するという形式であった。教材自体が発表形式に適応したものであった。2年生になってからは通常のテキストに戻り、1学期中はどのように展開していったらいいか試行錯誤が続いた。適切なイラストが必ずしもあるわけではなく、テキストも対話形式が多くて、retelling も

怠りがちであった。学期末も近づき、パフォーマンステストを継続すべきかどうか迷っていた時、ある生徒から「今回のパフォーマンスはどんなものをやるんですか」と聞かれ、1年間実施したお陰で、相当生徒に定着していると実感することができた。そこで継続を決心し、以下のように実施した。

1 学期に扱った題材と、文法項目は次のとおり。

1) About Britain (would like to .../ be going to ...)

2) A Restaurant with Lots of Orders (one ...the other / S look C)

3) Interesting Things and Places in Australia (will, can, must / 比較表現)

まとまった項目としては、比較表現だけなので、それを用いて人物、建物、動物などを紹介する、という課題を出した(資料1)。授業であまりretellingもやっていない状態で、どのような発表ができるか不安であったが、発表後、それが杞憂であることがわかった。内容的にも提示の上でも進歩の見られた発表が多かったのである。英語自体の表現形式が広がったこと、中2になり興味関心が広がって発表の話題が多様化したこと、生徒がこちらの提示の仕方(板書やイラストを張るなど)を積極的に模倣したことなどが主な原因と考えられる。1例を示す。

I'm a member of the hiking club, 野山. I'm going to climb Kitadake this summer. (北岳の写真提示) This is Kitadake. Kitadake belongs to the South Japanese Alps. (模造紙にアルプスの主な山に印をつけた中部地方の地図を提示) Mt Yari and Mt Hotaka are very popular. But Kitadake is higher than these popular mountains. It is the highest mountain in the Japanese Alps. It is 3,192 meters high and the second highest mountain in Japan. (再度、北岳の写真注意) There are lots of trees and many kinds of alpine flowers. I'm looking forward to climbing Kitadake.

なお、評価については後でまとめて述べる。

3. 2. 3. 2 学期

スピーキング活動としては、まずNHKスキットコンテストへの取り組み、ALTとの共同による面接テスト、そしてパフォーマンステストの順で述べる。

3. 2. 3. 1. NHKスキットコンテストへの取り組み

NHKの『基礎英語』が毎年実施しており、1グループ3人で課題スキットと自由スキットを演じるというものである。これまで show and tell 形式には慣れていたものの、対話形式はあまり実施していなかったため、このコンテストを通じてその形式にも慣れようというのが参加の目的であった。したがってあくまでも授業の一環であり、全員参加を目標にした。各クラス41名なので数が中途半端であるが、同じ生徒が2グループに参加することで全員参加が可能となった。課題スキットはALTとのチームティーチングの時間に発音やイントネーションで注意すべき

ところを指導し、また自由スキットの表現で不明なところを質問する時間も提供した（因みに130語で、最後にちょっとしたオチをつけるというのは中学生にとっては非常に負担である。NHKには自由スキットの再考を求めたい）。録音は、小部屋でグループ個別に行ったが、翌週にクラスの前で演じさせたところ、その方がずっと良かった。やはり、人前の発表の方が演技に熱が入るようである（スキット例は資料2参照）。

3. 2. 3. 2. ALTとの面接テスト

2年生になって、授業の初めにつづりと発音の関係（フォニックス）を少しずつ導入してきた。その理解を見るため、ポイントになる音を含んだ単語を複数用意し、正しく発音できるかを面接形式でテストした。ただし、それだけでは味気ないので、その後1分ほどある話題について自由会話をする時間を設けた。つまり1人2分ほどの面接である。41人に実施するためにはALTだけでは2時間要してしまうため、日本人教師である筆者と2グループに分けて実施した。2グループの評価に差が出てくるおそれがあるが、3学期に、それぞれが担当したグループを交換することで全体として差が最小限になるようにした（今振り返ると、単純にフォニックステストと自由会話の担当を分ければ良かったという気がする）。

3. 2. 3. 3. パフォーマンステスト

2学期はスキットによる対話が多かったため、パフォーマンステストも対話形式にしてみた。2学期に指導した題材と文法項目は次のとおり。

- 1) Rosseta Stone（受身）
- 2) John Manjiro（不定詞）
- 3) Konrad Lorenz（現在完了形）
- 4) ALTのティームティーチングで（～ing形）

パフォーマンステストの話題は“What are your hobbies?”とし、～ing形を中心に用いることにした。2～3人のグループで、それぞれの趣味について質問したり、答えたりした。生徒はそれなりに一生懸命取り組んだと思うが、一人の show and tell に比べると内容の掘り下げが少ないように感じた。My hobby is ～ing. といった後で、それがあまり展開せず、相手も Oh, I see. などと答えるだけで上滑りの印象が強かった。後で生徒に感想を求めると、会話を相手とするだけでいいのか、クラスに聞かせるようにすればいいのか、焦点がしぼれなかったということであった。確かに show and tell は聞き手にむけてストレートに紹介すればいいのだから、焦点がしぼりやすい。それに比べると、対話では相手との会話のタイミングを考えると同時に自分の趣味についてクラス全体にもわかるようにしなくてはならず、負担が大きいかもしれない。

3. 2. 4. 3学期

2 学期に対話形式のパフォーマンスは問題ありとわかったので、3 学期は原点に戻って自問自答形式の show and tell にした。3 学期に導入した題材、文法項目は次のとおり。

1) Sherlock Holmes (must, may / must have + 過去分詞)

2) Haiku in English (関係代名詞)

3) Mujina (文法の総合的なまとめ)

中でも、関係代名詞を用いた “R.H. Blyth was an Englishman who introduced Haiku to the West.” の形式が有用と考え、この形式で好きな人物を紹介する、という課題を出した。やはり、show and tell 形式がやりやすいようで、しかも自分の好きな人物ということもあって、力作が多かった。これまで各自発表時間 2 分として 2 時間取っておけば全員が終了したのだが、今回に限って言うと発表が量的にも質的にも高く、2 時間で終わらなかった。急遽、LL の時間を拝借し、3 時間でようやく全員の発表が終了したというほどであった。1 例を紹介する。

Look at this book. It is *King Lear*. Who wrote it?

Yes, William Shakespeare did. This is he. (シェークスピアの絵見せる) He was the Englishman who wrote many famous plays.

He was born in 1564 at Stratford-upon-Avon in England. This is Stratford's picture. (ストラットフォードの絵を見せる) This town, which lies on the beautiful River Avon, is one of the oldest town in England. In 1582, he married. But in 1591, he left his family and went to London. In London, he became famous soon as an actor and playwright. Between 1591 and 1611, Shakespeare wrote thirty-seven plays. In his later years, Shakespeare returned to Stratford, where he died in 1616, when he was fifty-two years old.

I think his plays are very impressive. So he became a famous playwright.

このスピーチでは、単に絵を張るだけでなく、重要な年号などは板書され、またストラットフォードとロンドンの移動なども矢印で図示されていたので、非常にわかり易いものになっていた。また、すぐに人物を紹介するのではなく、その著書を先に出してから導入する点でも工夫が見られた。その導入法は中 1 の 2 学期に行った過去形の学習が生きている点も注目に値し、こうした傾向は、このスピーチに限らず散見できた。

3. 2. 5. 評価について

スピーキングテストも、する以上は何らかの評価を伴わないわけにはいかない。しかし、定期考査のようにそれまでの理解力を厳密にテストする場合と違って、パフォーマンステストなどは、人前で発表をするということ自体が重要であって、評価はその次の発表のための encouragement という要素が大きいと思われる。だからといって、ただ単に感覚的に評価するというのではいけない。まず、事前に評価ポイントをはっきりさせておくことが重要である。筆者の場合は、以下の 3 つの評価ポイントを設けた。

1) 内容

2) 発音, 声の大きさ, 視線 (アイコンタクト)

3) 発表の工夫

1) は, 使用すべき文法項目 (比較級, 関係代名詞など) が入っているかとともに, 伝えるべき内容の展開の仕方も含める。2) は, 自分の発表すべき内容をよく練習したかということが反映される。練習不足の場合は視線が原稿に向かい, 声も小さくなりがちである。3) は絵を使用したり, 板書などの有無を見る。事前にこれらの項目を生徒に知らせておくと, 生徒もどこで努力すればいいか明らかになり, 準備もしやすくなる。

発表本番の時に大まかな評価をつけつつビデオ録画しておく。これは1度に40人もの評価をその場で公平につけるのは困難なので, 後で再度ビデオを見ながら, もう1度確認をする時に役に立つからである。

発表終了後の評価で注意すべきことは, 単にパフォーマンスの評価で終始しないことである。つまり, 次のパフォーマンスにつながるための評価を考えなくてはならない。そのためには各生徒に個人評価カードを用意する (資料3)。そのカードに, 再度ビデオを見ながら上記3点の評価をしつつ, 一言コメントを書いて各生徒に渡す。これは, まさに評価だけでなく, 次のパフォーマンスへの改善点や動機づけになるわけで, 特に実技的なテストの場合には次のステップを見据えた評価が大切なのではないかと思う。

以上, パフォーマンステストの評価についてまとめると次の2点になる。

- ・事前に評価ポイントを明示しておく。
- ・単なる評価だけでなく次の発表につながる改善点など簡単なコメントを加える。

3. 2. 6. まとめ

50期生を対象に行ったスピーキング活動とその評価について述べてきた。

スピーキングの評価は, ペーパーテストのようにある項目ごとに正解不正解をくっきりとつけることは困難で, 主観的な印象点になりがちである。しかし評価ポイントをしばっておくことで, 評価する側もされる側も目標がはっきりするという利点がある。また, 単なる数字の評価でなく, コメントによる具体的な改善点の指摘などが次の発表への動機づけになるということが, 2年間の実践の結論である。

3. 3. 中学3年生 (49期)

3. 3. 1. 中学3年生におけるスピーキングの到達目標とその根拠

2. 2. で提案した「スピーキング能力育成」の6カ年シラバスに基き, 1997年度中学3年生のスピーキング活動の到達目標を次の2点に具体化した。

(1) グループによるスキット (150語程度) の作成と実演

(2) デザイン・シンボルを説明するスピーチの発表

(1) では、既習の対話パターン等を組み合わせながら平易な表現を使ったスキットが自作できること、発表時には「おち」の部分で聴衆に笑ってもらえる表現力を持つことを目標とした。

(2) は国旗・トレードマーク等の中から気に入ったものを選び、それについて1分間程度のスピーチ (prepared speech) 発表するものである。事前に100語程度の原稿を用意し練習した上で、デザイン等の意図や由来を説明する活動である。

(1) (2) の活動が成立するためには、聞き手に「意味が届く」音声を表出できる能力が不可欠である。その能力を育成するための活動として「音読・レシテーション」の指導を徹底して行った。教科書という共通テキストを使用し一斉授業で指導可能なこの活動は「文字テキストを音声化する力」を育てるためには極めて有効な活動であった。

上記 (1) (2) の目標を徹底するため、授業開きの際に「授業目標・年間予定」を配布した。

中学3年(49期)・英語

<授業目標・年間予定>

- 1 方針 3 S's = Speedy, Systematic and Scientific
- 2 時数 4時間(TT, LL各1時間) / 週
- 3 教材 ・SUNSHINE English Course 3 (Kairyudo)
・BASIC Tactics for Listening, Oxford University Press
※「英単語征服ビデオ」基礎編・難関校編(各3巻) NHK/研究社
・プリント他

4 目標

①「音声発表力」の向上：発音練習指導、レシテーション、スピーチ

②ボキャブラリー・ビルディング

③リスニングの弱点補強：音変化を中心に

④文法指導の改善・充実：「常識」の再検討

⑤今月の歌

5 実技課題—上記①に関して

<1学期>

- ・音読：語句、文章
- ・レシテーション
- ・スピーチ①：自己紹介・今年の目標

- ・スキット①：NHKスキット・コンテスト「課題スキット」

< 2 学期 >

- ・レシテーション
- ・スキット②：NHKスキット・コンテスト「自由スキット」

< 3 学期 >

- ・スピーチ②：Show and Tell（シンボル・デザイン）
- （・ディスカッション：本校のゴミ問題）

6 評 価

- ①期末考査：大問ごとに出題の観点を明示

- ②面接テスト：スピーキング力の評価

- ③単語テスト※

- ④レポート

- ⑤授業での活動状況

- ⑥休み中の課題

- ⑦その他

なお強調するために、引用に際してスピーキング能力の指導・評価に関する部分を「網掛け」にした。また残念ながら、最後に予定していたディスカッションは準備が間に合わず実現には至らなかった。

3. 3. 2. スキットの指導

例年と同様に「NHK基礎英語スキット・コンテスト」に学年全員（123名・42グループ）で参加し、入賞を目標にスキットの作成と発表に取り組んだ。このコンテストは、基礎英語 1, 2, 3 の合計 3 部門からなり、2～3 人組のグループが「課題」「自由」の 2 つのスキットをカセットテープに録音して応募するものである。取り組みの経緯を以下に述べる。

< 1 学期 >

- ①気の合った仲間同士で 3 人組のグループを作る。

- ②「課題スキット」を練習し全員の前で発表する。

発表の様子は、ビデオとカセットテープに収録する。

< 夏休み >

- ③ 3 人のメンバーそれぞれが 50 語程度の「自由スキット」原案を作成する。

< 2 学期 >

- ④ 3 つの原案から一つ選んで話を膨らませ、3 人で第 1 次原稿を作成する。

⑤別のグループと原稿を交換して目を通し、理解しにくい箇所等を相互に指摘し合う。

⑥⑤の指摘を参考に、より平易な表現を使った第2次原稿を作成する。

原稿改訂の際には、JTE, ALT が適宜援助する。

⑦グループで発表練習を行う。

必要に応じて、JTE, ALT が音声指導を行う。

⑧JTE, ALT の前で、発表のリハーサルを行い、アドバイスを受ける。

⑨全員の前で「自由スキット」を発表する。

発表の様子は、ビデオとカセットテープに収録する。

自由スキットは「台本が命」である。読んで面白いスキットを書けなければ話にならない。そこで、原稿作成の過程に③～⑥のように十分な時間を確保した。その分だけ原稿の音声化指導にかかる時間は⑦⑧と短くなった。しかし、3. 3. 4. で詳しく述べるように、教科書の「音読・レシテーション」活動を通して「意味が伝わるように音声化する」力を日常から培えば、取り立てて音声指導を行う必要は生じないことが分かった。

3. 3. 3. スピーチの指導

久保野（1997）は、スピーチ指導改善のポイントは「原稿作成」指導と「レシテーション」指導に焦点化できる、と主張している。分かりやすいスピーチを発表するためには、先ず「読み手に優しい」原稿の作成が必要だ、ということである。第1次原稿作成までの指導の詳細は拙稿に譲り、以下に推敲と改訂の過程を示す。

①「スキット・コンテスト」の3人組による peer-correction 活動。

・各自の第1次原稿に、他のメンバー2名が目を通す。

・理解しにくい箇所等を指摘し、適宜改善策を提案する。

②①の指摘を参考に推敲する。

③必要に応じて、①②の過程を繰り返す。JTE, ALT の援助を適宜受ける。

このプロセスを経ることによって、原稿は見違えるほど分かり易く平易な表現を用いたものに姿を変える。

次に「聞き手に優しい」音声作りについて述べたい。①～③のような過程を経て、立派な原稿が書けたとしよう。しかし、音声としてその内容が聞き手に伝わらなければスピーチとしては失格である。そこで繰り返し強調しているように、「音読・レシテーション」で培った力を活用する必要が生ずる。

筆者はかつて、スピーチを発表する生徒を事前に呼び、個別に音声指導を行っていた。しかし

ある時「各生徒に注意していることの大部分は共通している」ということに気付いた。言い換え
ると、大部分の生徒が文字テキストの音声化に関して共通の弱点を持っていたということになる。
このような弱点を個別に矯正するのは非効率極まりない。そこで、授業中の一斉指導の中で「意
味が伝わるように文字テキストを音声化する」システムを生徒個々の中に育てられないものかと
考えた。そのために行ったのが、教科書の「音読・レシテーション」指導を徹底することである。

3. 3. 4. 音読からレシテーションへ

教科書もスピーチ原稿も「内容が理解できた文字テキスト」という点では変わらない。キー
ワードをたよりに内容を思い出しながらテキストをレシテーションするという点では全く同じと
言える。違いと言えば、テキストが「与えられたものか自作か」だけの差である。こういった意
味で、レシテーションはスピーチのシミュレーション的活動だと考えることができる。

「音読からレシテーション」へ至る指導には、授業の最後10～15分程度を原則として当て、①
口頭導入 (oral introduction) → ②黙読 (silent reading) → ③内容解説 (explanation)
を経て十分に理解できた内容を口頭で発表 (produce) する活動と位置付けた。このような手順
(procedure) で授業を構成しているのは、隈部 (1996) が指摘するのと同様に「音読」をスピー
キング活動の一部と位置付けているからである。

上記③に続く「音読・レシテーション」の指導過程 (④⑤) を以下に詳しく述べる。

④Reading Aloud

- a) Model Reading…区切り・抑揚等を強調した教師の模範音読
※音読のモデルは真似やすく誇張する必要がある。
それには、テープよりも教師の肉声が適している
- b) Chorus Reading…音声化の規則 (青木 1933) ・コツを示しながら全体練習
- c) Individual Reading…何人かに音読させ、到達度の確認
※不十分な場合は、b) に戻り再度全体練習
- d) Read and Look Up…一文ごとに「黙読→顔を上げて音声化」の練習
※「読み上げ」からスピーキングに至る第1段階
音声化の際には「絶対にテキストを見ない」を徹底

⑤Recitation…黒板に書いたキーワードを参考に内容を再生 (reproduce)

- a) Model…キーワードを指しながら発表する見本の提示
※自分の言葉を適宜交えることによって、テキストをそのまま再現
する必要がないことを示す。
- b) Chorus…教師の指すキーワードを見ながら全体練習
- c) Individual…一文ずつ指名し発表状況の確認
- d) Presentation…全体の前で1段落～1頁分を発表

→☆次回のReviewでは、a) b) を簡単に繰り返した後、数名がd) の発表を行う。

3. 3. 5. スピーキング能力の評価

前節で紹介した活動と評価の関係について、ここで整理する。筆者は、スピーチ（可能ならばディスカッション）を年間の最終目標とした。そして、その準備段階として「レシテーション」を位置付けた。そこで、2学期には「レシテーション」テストを実施することとし、続く3学期は授業中の「スピーチ」発表を評価の対象とした。

このような「実技テスト」を導入した経緯は、鈴木他（1994）の拙稿を参照して頂きたい。また4技能の全てが、ある意味では「実技」と言えるが、ここでの「実技テスト」はあくまでもスピーキング活動のみを指すものとする。

実技テストは原則として、各学期末のチーム・ティーチングの時間に実施するようにした。従って、生徒はJTE、ALTがそれぞれ用意した面接の関門（合計2カ所）を通過しなければならない。生徒1人に対して1分間で行えるテストを用意したため、50分という限られた時間の中で生徒各自が2種類の面接テストを受験できることが可能となった。

評価に当たっては、JTEとALTがそれぞれ別の基準を設定し、原則としてA～Dの4段階で採点することとした。例えば、JTEは個々の音素や文の抑揚などを分析的（analytic）に評価することとした。一方、ALTは総括的（holistic）な評価を担当し「誤りを恐れずに積極的に話せたか」等を採点基準とした。もちろん、テスト内容は採点基準と合わせて事前に公開済みである。十分に練習を積んでテストに臨ませるためには、事前の予告は有効である。

各学期の実技テストの内容を以下に紹介する。教科書（SUNSHINE English Course 3）との関連については、該当個所に「網掛け」で示した。

<1学期> 7月初めに実施

ALT: 電話で自宅に道案内 ← Program 1 Meeting Friends: 電話で道順を説明

①実施方法

- ・ALTは生徒各自の自宅周辺の道路が書かれた地図を持つ。
- ・駅からのルートは記されていない。

②採点基準

- ・電話でのやりとりを通して、間違いなく家までのルートをたどれたか。
- ・家に至りつければA-Bとする。誤った場所に行ってしまったたり時間切れとなった場合はC-Dとする。

JTE: フォニックス、発音チェック

①実施方法

- ・面接カードを渡し、順に音読させる。

②採点基準…下記の「面接カード」参照

- ・フォニックス：綴りが正確に音声化できたか。

- ・発音チェック：各音素が正確に調音できたか。
- ・自然なリズム・イントネーションで読めたか。

中学 3 年生 (49期)

<面接 (Oral Interview) カード>

A 【フォニックス】 次の単語を 1 回ずつ読みなさい。(1×10=10)

1. theft
2. quite
3. theme
4. tub
5. gist
6. post
7. waist
8. yawn
9. stew
10. crouch

B 【発音チェック】 次の文を 1 回ずつ読みなさい。(2×5=10)

1. I can see five fresh fish on the table.
2. I am very very sick. I ate too many vegetables.
3. I can eat three thick sandwiches.
4. I will run and get the red rope.
5. I can see a long long ladder.

<2 学期> 12月初めに実施

ALT: 「文化祭でどのような仕事をしたか」説明する。

①実施方法

- ・前半: “What did you do in the School Festival this year?” という質問に答える。
この部分は事前に準備させている。
- ・後半: 返答内容に関する質問に、即興で答える。

②採点基準…前半の質疑 (prepared) と後半の即興質疑 (impromptu) に分け、それぞれ A-B の 2 段階で評価。

- ・前半: 仕事の内容を具体的に説明できるか。
- ・後半: 誤りを恐れず、工夫して曲がりなりにも意図を伝えることができるか。

JTE: 教科書のレシテーション ← Program 7 The Home Planet

①実施方法

- ・移動黒板のキーワードを参照しながら、教科書の内容を暗唱 (recite) する。
その際、必ずしも教科書通りの表現を使用する必要はない。

②採点基準

- ・文レベル: 意味の区切れ (sense group) と、強勢・抑揚が適切に表現できているか。
- ・段落レベル: 意味の対比 (contrast) を意識して音声化できているか。

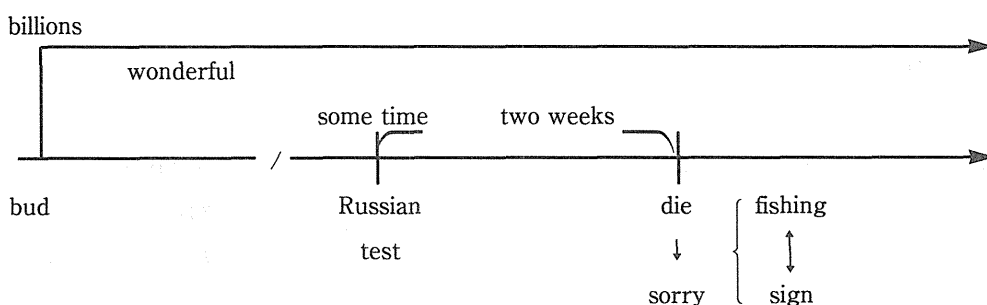
<教科書本文>

Billions of years ago, a **bud** of life came out on the earth. Since then the earth has produced the **wonderful** living things we know today.

Some time ago a Russian astronaut did certain tests with fish in space. He wrote "After **two weeks** the fish began to **die**. We felt very **sorry** for them. On the earth, we enjoy **fishing** for fun. But when we're far from the earth, any **sign** of life is welcomed."

(SUNSHINE English Course 3: Program 7)

<レシテーション用：キーワード>



<3学期> 1～2月の授業時

ALT/JTE: 気に入ったシンボル・デザインを選び、Show and Tellを行う。

← Program 5 What Do Symbols Tell Us?

①実施方法

- ・選択したシンボル・デザインを模造紙に描き、黒板に貼る。
- ・手に持ったキーワードのメモを適宜参照しながら、国・都市・団体等の説明をする。
- ・採点者及び他の生徒は原稿を持たず、集中して発表を聴く。

【例】国旗：France, Union Jack, Stars and Stripes, Korea, Canada, Thailand, Greece, Guinea他

都市：東京都、練馬区、神奈川県、川崎市高津区 他

団体：Olympic, Rolling Stones, Suntory, UNESCO, Bell Mark, 郵政省、本校の校章、慶応義塾、東武電鉄、西武電鉄 他

②採点基準：次の3点に分け、それぞれA-Bで評価。

- ・平易な表現を用い、具体例を示した分かりやすい構成になっているか。
- ・音声を通して、意図した内容が十分に伝わってくるか。
- ・黒板に貼るデザイン・シンボルが見やすく作られているか。

<スピーチ原稿例> 生徒の原稿のまま

This design is the symbol of the Olympic Games. It has five rings. These five rings stand for five continents; such as Asia, Europe, Africa, America and Australia. As you know, we are going to hold the Olympics in Nagano, so we have often seen this design recently.

Do you know who made this design and when it was? In 1914, at the 20th anniversary of I.O.C, the International Olympic Committee, a Frenchman called Baron de Coubertin invented it. Why did he choose this design? Can you guess? Because he really hoped people on these continents would keep very friendly forever. This is also the reason he proposed the modern Olympics.

(以下省略)

以上に紹介した実技テストは全てビデオカメラで録画した。また、久保野（1998b）で紹介したようにパラボラ・マイクや有線マイクを活用し、音質の向上を図った。音質の劣悪なビデオは後で見返す気にならない。記録したものを後で有効利用するためには、画質・音質向上のための努力を惜しんではなるまい。

最後に、テストの様子をビデオで収録する目的を2点指摘したい。第1の目的は、採点用の資料を保存することである。実技テストの場合、所定の時間内に全てを評価できるとは限らない。後で見直すにはビデオ記録が必要である。次に第2の目的である。これは前年度までの活動記録の中から参考となる手本を選んで蓄積することである。生徒の発表意欲を喚起するためには「先輩が活躍する様子」は非常に有効な刺激となる。我々教師の説明よりも、実際のパフォーマンスの方が生徒にとっては遙かにインパクトが強い。まさに「百聞は一見に如かず」である。また、他クラスの様子を見せることも発表への有効な動機付けとなる。ふだん目にする事のない仲間の意外な活躍には大きな刺激を受けるようである。これは、peer-pressure の積極的な活用とも言えよう。

3. 4. 英語 I (48期)

3. 4. 1. 高校1年生におけるスピーキングの到達目標とその根拠

英語 I ではややもするとリーディングに重点が置かれてしまうが、4技能をバランスよく、特に「ことば」とあるという基本を念頭におき、すべての活動がスピーキングにつながるような指導展開を目指した。到達目標は以下のとおりである。

- (1) 聞いた内容について、適切に応答する。

(2) 聞いたり、読んだりした内容の概要や要点を伝える。

(3) 聞いたり、読んだりした内容について、自分の意見・感想を述べる。

3. 4. 2. スピーキングの活動

生徒にある題を与えてそれについてスピーチをさせることは生徒のコミュニケーション能力を育てる上で重要なことであるが、実践期はまだ言語的に吸収しなければならないことが多くある時期なので、段階を踏んだきちんとした指導が必要になる。このことに重点を置いたスピーキング活動をタスク・シートなど利用して的確に行う指導展開を試みた。以下、到達目標ごとにどのような活動を行ったかについて述べる。

3. 4. 2. 1. (1) 聞いた内容について、適切に応答する。

[1] 対話の基本となる問答の練習をする

高校になると中学段階で学習した文とは異なり、語彙・文も複雑になりまた文自体も長くなるので、相手の質問に集中しないと正確な答え方ができない。英問に対して正確な答え方ができることが対話を発展させるために重要なことである。このことを生徒に理解させて取り組むと効果的な指導が期待できる。聞いたことに対し単に相手に答えが通じれば良いということで、簡単に Yes, No だけで答えることも状況に応じて必要ではあるが、対話相手との関係や場合によりきちんとした応答も要求される。つまり Yes./No. だけでなく Yes, I did. / No, I didn't. と主語、動詞、代動詞も含めて答えることで丁寧な応答に慣れさせる。また When did you go to the concert? What did you buy for him? などの WH の質問に yesterday, desk のように答えのみで前後がないと場合により乱暴な応答に聞こえることもあるので、I bought a shirt. のような応答の仕方も練習させる必要がある。また対話を発展させるために It's made in Italy. のように相手の求めている解答に更に一言付け加えて返答するような心がけが重要であることを伝える。

これらの練習に最適な教材として Amazing Facts (By Vance Johnson 1980, Kinseido Ltd.) をとりあげた。物事の由来を興味深く伝える内容を20編集めたもので、内容に関した10題の英問に答えることで自然にその内容を説明することができるようになっている。一例として Who established the first calendar? が挙げられる。スピーキングにつながる活動として次のような方法を行った。

<活動手順>

- 1) テープを通して全体の内容を聞く。
- 2) テープで内容に関する英問を聞く。
- 3) 英問に対してタスク・シート(資料4)を利用し適切な答方を確認する。
- 4) 上記の英問英答をを利用して2人で対話をする。

5) 英答の部分だけを利用し内容の概要を発表する。(資料5)

[2] 場面に応じた問答や自然な対話表現を学ぶ

リーディングを主とした教科書、リスニング中心の教材だけでは日常的な表現に触れる機会も限定される。そこでビデオ、映画などを通して自然な対話のやりとりを学びそれを練習してみる。

① 映画

教室という限られた中で、対話を学ぶ方法として映画が挙げられる。映画にも様々あるが、生徒の興味が最後まで持続する作品を選ばなければならない。原語とは言え、生徒のレベルでも聞き取り可能な部分が少しでも多くある作品を選ぶことが重要になる。単語1つでも聞き取れば、「本物が聞けた」という実感を味わえ、生徒の興味も持続するであろう。字幕つきが良いか否かはその内容や台詞の速さまた鑑賞後の授業の展開次第で決定すればよい。

以上の観点から選んだ作品の1つとして*Great Expectations* (by Charles Dickens) がある。作品のプロットが明確で、「次はどのようなことが起こるのだろう」と絶えず観る者に好奇心を抱かせる展開である。

<活動手順>

- 1) 字幕つきの映画 *Great Expectations* (1946, UK) を2回に分けて観る。
- 2) ストーリーの展開で重要な部分や山場をテープで聞く。また同時に同じ部分をスクリプトで読む。スクリプトは*Great Expectations*, Charles Dickens (Retold by Clare West 1992, OUP) を選んだ。
- 3) 挨拶、感情的な表現、意見の主張など日常生活で頻繁に使われる表現を中心に対話の練習をする。

② インタビュー

様々なインタビューを聞き、質問やその応答の仕方に慣れるようにする。生徒が実際にインタビューする機会として考えられるのは来日している人に対するインタビューである。この一例として日本を訪問したことのあるインド人夫妻(ある地方の王族)のインタビューを聞き、それを参考にインタビューの質問を考えさせた。質問には5W1Hを多く含むようにし、またインタビューの質問としてふさわしくない質問は何かを話し合わせた。実施としてアイルランド人に授業に参加してもらい、生徒のインタビューに応じてもらう機会を設けた。

3. 4. 2. 2. (2) 聞いたり、読んだりした内容の概要や要点を伝える。

高等学校学習指導要領にもあるように、「意志伝達を行うために、伝えたい事柄の内容を整理して、重要なことを落とさないようにして話す」ことはコミュニケーション活動で最も重要なことである。要点をまとめ更に口頭発表できるようにする練習として、タスク・シートを利用し段階を踏んだ次の活動を行った。

〔1〕図や表を利用して内容を説明する。

①英語 I の教科書 *Crown I* (三省堂) “Can You Believe Your Eyes?”

Optical illusion on stageという見出しで図解とともに内容を箇条書きにまとめる。図解つきのまとめを全員に印刷して配布。担当生徒は黒板で図解を利用しながら英語で説明をした。

②*Crown I* のLesson 5 “A Document For All People” では独立宣言を起草する際の Thomas Jefferson のエピソードや思想が紹介されている。生徒には特に Jefferson の信念について考えさせタスク・シートでその要点をまとめさせ口頭発表させた。(資料 6)

〔2〕自分のことばであら筋や概要を述べる。

①*Crown I* のLesson 2 “So Many Peoples, So Many Cultures” でオーストラリア政府のアボリジニに対する取り組みが紹介されている。これとほぼ同じ内容をオーストラリアの大学教授による講義(NHK放送大学)の一部を聞くことで政策を表にまとめた。またアボリジニーによって語られた生きるうえでの彼らの哲学を聞き、その要点を生徒の言葉で発表させた。(資料 7)

②James Kirkup の書いた *Room For One More* と *A Foreign Hotel (Folktales And Legends Of England 1971, Seibido)* を読みそのあら筋を発表させる。生徒に物語の途中まで聞かせその後の展開がどうなるかをグループで話し合わせその結果を代表者が発表していく。更に後半を読ませ物語全体のあら筋を自分のことば(200語程度)でまとめさせ口頭で発表させた。

(資料 8)

3. 4. 2. 3. (3) 聞いたり読んだりした内容について、自分の意見・感想を述べる

〔1〕レポート形式で意見をまとめ発表する。

教科書*Crown I* と *A Genius in a Wheelchair - Stephen Hawking* (桐原書店) の2冊を利用して、Stephen Hawking の半生と彼の理論について読み、またホーキング来日の際に行った講義(NHK放送大学)の一部をビデオでみることで、ホーキングが私たちに伝えようとしたメッセージを考える機会を与えた。英語は苦手だがこの分野の理論には詳しいという生徒を起用し、黒板で図解を利用し理論の一部を説明をさせた。また全員がテキスト (*A Genius in a*

Wheelchair) 付随のレポート(資料9)を英語で書き、自分の意見・感想を発表した。

[2]スピーチに慣れる

自由題でスピーチをさせることもよいが、有名なスピーチを聞いてその内容をまとめることで、スピーチの構成を学ばせる。また聞き手を引きつけるスピーチとはどのようなものかを紹介することで、生徒にスピーチをさせる時のヒントを与えることができる。授業ではキング牧師のスピーチを聞きレシテーションを行うことにした。

活動内容

- 1) 1963年に米国ワシントンの集会で行われた Martin Luther king の演説をビデオでみる。またキング牧師の公民権運動に関する活動の歴史やその時代背景を見て、牧師の主張を考えさせる。
- 2) オーディオ・テープで再度演説を聞き、パラグラフ毎にその内容を理解させる。
- 3) パラグラフ毎に理解した内容をタスク・シートに英語で書いてまとめる。
- 4) タスク・シートにまとめた内容を最初の第1パラグラフから11まで、11人の生徒が英語で口頭発表をする。
- 5) 演説をテープの後について発音してみる。その際牧師の語り口調を真似して主張したいポイントを理解させる。次に10人の生徒が最初から1パラグラフ毎順にテープの後についてリポートする。
- 6) 演説で特に有名な部分 (I have a dream./ Let freedom ring.) を暗唱し、上記の活動で発表しなかった生徒がその成果を発表する。

3. 4. 3. 評価について

スピーキング活動を的確にするために行った様々な活動を考慮に入れ、総合的に評価した。特に客観的な評価対象としたものは、毎回の授業で取り組むタスク・シートである。授業中に迂回し生徒と内容に関し対話をする事で習得状況を把握することができるが、毎回シートを回収して各人の理解状況をより詳しくみる。評価観点は効果的に口頭発表できるように如何に明確に内容がまとめられているかということである。

スピーキングの評価に関しては、通常の授業の中で生徒の表現力を観察し評価していく方法が即座に取りかかれる最も確実な評価法だと思われる。生徒の発言や発表また教師が迂回して生徒とのやりとりを行うことで常に細かい観察が可能である。評価は適切に答えられているか否かあるいは5割程度というように3段階の大まかな基準を目安に行うことも一案である。授業中に絶えず記録するといことは難しいので、一定の期間を観察して総合的に評価する方法がある。客観性について疑問を持つ人もいるかもしれないが、すべての生徒に同時に同様の質問をしなければ評

価をしてはいけないということでも、また不可能であるということでもない。通常の授業で ALT と生徒のやりとり、グループワーク内での生徒の会話力を評価することほど生きた評価はないのではないだろうか。

3. 5. オーラル・コミュニケーション B (49期)

3. 5. 1. オーラル・コミュニケーション Bにおけるスピーキングの到達目標とその根拠 (49期)

昨年度の久保野他 (1998) で、実践期 (中学 3 年・高校 1 年) の到達目標を暫定的ながら下記のように提案した。ここでは、若干の補足をして、より具体的なイメージがわくように説明を加えてみる。

(a) リズム・イントネーションの効果的な使い方

実践期になると、自分で口頭発表したり、クラスメートや日本人教員、さらには外国人講師とのやりとりの機会が、基礎期に比べてかなり増える。このため、基礎・基本を身につける「練習」の時期というよりは、より「実践」に近い場面での言語使用が求められる。したがって、英語を話すときに、リズムやイントネーションの効果的な使用が求められる。

(b) 様々な形式による口頭発表 (Recitation, Speech, Skit)

基礎期では、自己紹介をはじめとする身近なことがらを英語で説明することが求められた。実践期では、インターパーソナルな要素を増やし、スキットを練習し、実際に演じてみたりする事も求められる。さらに、英語で行うレシテーションや 1 分間スピーチなどで、「聞き手」を意識したスピーキング練習の場面が増えるのである。

(c) より内容のある事柄を英語で伝える (体験談、興味のあるものの説明など)

ここでいう「より内容のある」という意味は、「より現実的な」とか「より伝達価値のある」という意味に解釈することができよう。基礎期でのスピーキング指導の到達目標である Show and Tell や Story Telling といった活動に比べて、自分の体験や興味のあることがらの説明をすることで、自分の考えや意見をまとめたりする活動となる。加えて、放送や相手の言ったことを聞き取った上で、自分の考えや自分自身の体験との比較などを、明確に英語で伝えようとする要素が増えてくると言える。

3. 5. 2. スピーキングの活動

1998年度の高校 1 年生は、英語 I (3 単位) を八宮、オーラル・コミュニケーション B (2 単位: 以下「OCB」と略す) を谷口が担当している。ここでは、谷口の実践を中心に考察していきたい。なお、OCBは基本的には「リスニング中心」の科目ではあるが、相手の言ったことをふまえて自分自身の考えや体験談などを伝えるという活動も含まれており、実際の授業ではリス

ニングだけでなく、スピーキング活動もかなり含まれる。また高1で行う ALT とのチームティーチングは OCB 担当者が行うことになっており、授業中のALTとのやりとりをはじめとしてスピーキングの要素はかなり多い。

ここで OCB の典型的な授業形態を説明しておきたい。今年度は、ALT との普通教室での授業とLL教室での授業の2種類を担当している。それぞれおおまかに3つの場面で構成されている。

(1) ALT との授業

- ①ウォームアップ
- ②News Flashes
- ③教科書

(2) LL 教室での授業

- ①ウォームアップ
- ②『NHKラジオ・英会話』
- ③ビデオ鑑賞

3. 5. 2. 1. ウォームアップ活動

4月の授業開き以来、継続して行っているウォームアップ活動がある。この活動に関して、その手順や目的を論じてみよう。授業開きでは、筆者が実演して見せたが、2回目以降の授業では、生徒が出席番号順に準備して、担当している。全体で5～8分程度の活動で、マジカル・クイズとイージー・リスニングの2種類の活動で構成されている。

(1) マジカル・クイズ

一言で言えば、ペアで行う Guess Work の一種である。一方の生徒がある品物を英語で説明し、もう一方がその単語を当てる、という活動である。このとき、その単語そのものを使ってはいけないというルールがある。また、このマジカル・クイズは、一般に行われているヨコのペアではなく、タテのペアで行う活動である。この活動の手順は以下の通りである。

- 1) タテのペアを作り、教卓に近いほうの生徒が後ろを向き、もう一方の生徒と向かい合う。
- 2) 担当の生徒が「電話」とか、「テレビ」といった単語を日本語で黒板に書く。もちろん、実物や写真、絵などを提示してもよい。黒板に書くのは、出題する単語をクラス全体に知らせるためである。
- 3) 全員を立たせゲームを開始する。目安はおよそ1分以内で、正解が得られれば着席させる。
- 4) 所定の時間が経過したら、正解を確認する。次に、ペアの前後を入れ替えて、もう1題出題する。以下、同様に行う。

上記の作業が終了したら、以下の活動を行って行くことで、単語の定着や説明の仕方の確認をすることができる。

5) ALT の協力を得て、単語を英語で説明してもらおう。または、英英辞典の定義を読み上げる。

このマジカル・クイズでは、生徒は自分の英語力のすべてを出して取り組む必要がある。または、説明のうまさを問われる場合もある。

説明のレベルは、おおまかに次の3レベルに分類できる。たとえば、出題例が「ペン」だと仮定してみよう。

レベル1（初級）：単語で説明するレベル。pencil, paper, eraser などの“pen”に関連した単語をできるだけたくさん羅列することで、連想ゲーム風にヒントを出す。

レベル2（中級）：句や節で説明するレベル。たとえば Something to write with.や Something you need for writing.というように、句や節で説明する。

レベル3（上級）：文で説明する。たとえば You need this to write something. のような単文で説明する場合や、When you write something, you need this.といった複文で説明する場合がある。

現実には、上記のレベルを混在して使うのだが、マジカルクイズのような活動を継続しているうちに、自分の英語の潜在能力が活性化し始め、レベル3に近づくことが少なくない。

前述の「説明のうまさ」に関してだが、たとえば「はがき」が出題されたときのことである。一人の生徒が“50 yen, not 80 yen.”と郵便料金のことを説明し、続けて“Not a letter, but ...”と説明をした。他の生徒が説明していた“It’s white. It’s rectangle. It’s made of paper. ...”という英文に比べれば稚拙だが、正解の“postcard”を引き出すには十二分なヒントであったことは明らかである。

マジカル・クイズは一見すると単純なゲームであるが、実はコミュニケーション・ストラテジーの習得につながる練習要素はもちろん、既習の英語表現の知識、または自分が潜在的に持っている英語力の活性化を図る活動と言える。

(2) イージー・リスニング

この活動は、英文を聞いて、その内容の真偽を問うものである。主に「耳慣らし」の意味もあるが、この活動を生徒に担当させることでスピーチ指導につながるものと思われる。具体的に言うと、英文で原稿を書くことや他の生徒に聞き取りやすく発表するなどのプレゼンテーションの初歩的な作業になるからである。活動の手順は、以下の通りである。

- 1) 毎時間、担当の生徒は5つの英文を前もって考えてくる。それぞれの英文は simple statement であり、たとえば Sydney is the capital of Australia. というものである。
- 2) 該当の生徒は教卓に立ち、英文を読み上げる。このとき、英文を読み上げるのは「1回のみ」としている。1回のみを読み上げや放送というのは、現実の場面により近くなるし、リスニングするときの適度な緊張感も生まれる。
- 3) 他の生徒は、読み上げられた英文の内容の真偽を判断する。内容が正しければ T (True) を、正しくなければ F (False) を、専用シート (資料10) に記入する。
- 4) 担当の生徒はもう一度英文を繰り返し、答えあわせを行い、1問2点で採点を行う。このとき、答えがTであれば追加情報を、Fであればその理由と正しい情報を伝える。

先に述べたマジカルクイズとイージーリスニングの出題内容は、情報カード (資料11) に記入させ提出させている。このカードをもとに、データベース化を計画しているが、詳細は別の機会に譲る。

以上が、授業の冒頭に行うウォームアップ活動である。

3. 5. 2. 2. 中心となる活動

ウォームアップが終わったあとに続く活動は、ALT とのティームティーチングの授業とLL教室での授業とは構成や進め方は大きく異なる。

まずALTとのティームティーチングの授業であるが、大まかに以下のような手順で行っている。

- (1) ウォームアップ
- (2) News Flashes
- (3) 教科書を扱う

使用している教科書は、*Oral Communication Course B - LISTEN<New Edition>* (桐原書店) である。ただし、中心となる活動はリスニングであり、本稿では触れないこととする。LL教室での授業の実践は過去に紹介したことがあるので省略する。したがって、ここでは News Flashes を中心に論を進めていきたい。

News Flashes は、文字通り、授業の当日や前日、遅くとも前の週に起こった事件・事故などを中心に、ALTが自分のことばでニュースを説明してくれる活動である。題材は、ふつう *The Japan Times* や *CNN News* などの新聞、テレビ、ラジオから採用している。

まず ALT が、黒板に得意の絵を描きながら、やさしい英語で説明していく。次に、キーワードの発音練習や意味の確認を行いつつ、そのニュースのサマリーを黒板に板書していく。そして、全体のストーリーが終わった段階で、ALT が生徒に内容に関する問いかけを行う。平均して、

1つのストーリーについて10～20名ぐらいの生徒を指名する。時には、一人の生徒にストーリー全体をリプロダクションさせたり、複数の生徒が共同でストーリー・テリングを行うこともある。発表の際には、黒板に書かれたキーワードやキーセンテンスを参考にしながら、ストーリーを英語で語っていく。

この News Flashes は、スピーキング指導においては非常に興味深く、効果が期待できる活動と言える。というのも、題材が身近で最近起こった事件・事故の話題でもあり、また ALT 自身の言葉ということで、非常にわかりやすい英語となっている。しかも絵や板書を利用してストーリー・テリングを行うという、生徒にとっても取り組みやすい活動である。

3. 5. 2. 3. 各活動の効果

高校1年生を対象にしたオーラル・コミュニケーションBの授業では、スピーキング活動に直接的または間接的に結びつくものとして、3つの活動について論じてきた。ここで、それぞれの活動とスピーキング指導における効果を考えると、おおまかに次のように言える。ただしこの場合の「効果」とは、中期的・長期的視野に立った効果であって、短期間に得られる効果ではないことを強調しておく。

①マジカル・クイズ

スピーキングの力をつけようとしている生徒にとっては、事物やものごとを適切に説明するという description 能力を養成することが可能となる。

②イージー・リスニング

問いかけの5つの文を作るという意味で、幅広い題材から特定の話題を絞り込んでいく Topic Selection の訓練になりうる。

③News Flashes

時事的な話題を、筋道立てて話すというStory Tellingの練習となる。また、相手に理解してもらえるような的確なプレゼンテーション能力を身につけさせる。

3. 5. 3. 評価について

オーラルコミュニケーションBでの評価活動は、生徒自身が活動の結果を記録・保存する方法と、授業の諸場面における教員の観察による方法に大別することができる。

前者は、専用シートを用いて、マジカルクイズとイージーリスニングの結果を記録・保存するものである。この方法により、生徒たちは自分のリスニング能力の発達段階を概観することができる。また、成績を自己管理することで、活動への取り組みも「自主性」が重要な鍵となる。

後者は、授業中の生徒同士、または生徒とALT/JTEとのコミュニケーション活動を観察し、その結果に基づいて話す能力を評価する方法である。評価基準としては「内容の理解度」「英語の適切さ」「英語の流暢さ」「反応の適切さ」「活動への参加度」などが挙げられる。[参考：

Teacher's Manual; Oral Communication Course B: Listen<New Edition> (桐原書店; 1998)]

加えて、定期考査等で「スピーチ原稿を英語で書きなさい」というライティングの課題を出して、スピーキングの前段階の活動を課している。評価は書かれたものの内容や英語の適切さなどを考慮し、A、B、Cの3段階評価で行う。ちなみに、1998年度1学期の課題は“Freindship”であり、これは本年度の全英連英作文コンテストの課題でもある。生徒たちにとっては下原稿となり、夏期休業中の課題につなげることができた。

3. 6. 英語Ⅱ (47期)

3. 6. 1. 英語Ⅱにおけるスピーキングの到達目標とその根拠

久保野他 (pp.172-3, 1998) の発展期の到達目標を参考にして、高校2年生の到達目標とその根拠を以下のように考察した。

(1) より高度の内容を英語で伝える。

基礎期、実践期においては、日常的な事柄について主に話していたが、発展期ではやや抽象的な事柄についても話すことができるようにする。

(2) 意見交換ができる。

ディベートやディスカッションのような、相手の考えを聞いて自分の考えを述べる活動を行う。

(3) 場面や状況に応じて話すことができる。

状況に応じて自分の考えを相手に伝えることができるようにする。スピーチ、レシテーション、スキット、ディスカッションなどの活動を土台にして、英語のスタイルやフォーマリティーにも注意を払って話す。

3. 6. 2. スピーキングの活動

高2では教科書として *Crown II* (三省堂) を使用した。このテキストは内容の面でも言語材料の面でもレベルが高く、各レッスンの背景的な知識や文法の指導に相当な時間をとられてしまうことが多い。日常的に英問英答などのコミュニケーション活動を行っているが、生徒が主体的に参加する活動の時間を確保する必要性を感じるが多かった。そのために、各学期ごとに、スピーキングのテーマを決めて集中的に取り組ませた。1学期はスキット、2学期はディベート、3学期はスピーチを行わせた。

(1) スキットについて

Crown II の Lesson 3 “Try This” は English Proverbs を説明した課である。この課が終了した時に、生徒に次の課題を出した。なお、*Crown II* の表の見返しにある English Proverbs (16

- 1 各班は6月16日(月)(1, 3組は6月17日(火))までに, *Crown II* の表の見返しにある“English Proverbs”(16個)か, 下の Proverbs (18個)の中から, proverb を一つ選び, 下の用紙に書き提出すること。(同じ proverb に希望が重なりすぎた場合, 変更してもらう場合があります。)
- 2 各班の中で役割を分担すること。(スキットを行う2名の生徒と, 最後に proverb を英語で説明する1名の生徒)
- 3 dialogue は, オリジナルなものを作成すること。わからない部分があれば, 事前に Mrs. Petersen か, 私に質問して下さい。
- 4 上演中は原稿を見ないこと。練習を積んで下さい。
- 5 観衆の生徒は, 評価カードに必要事項を記入して下さい。
- 6 スキットと proverb の説明の原稿を清書して, 事前, 又は事後に提出して下さい。
- 7 6月20日(金)に上演する班は, 早めに準備しておくこと。
- 8 スキットのパフォーマンスは, VTRに撮ります。
- 9 上演の順番は原則として, 出席番号順とします。

1 班名 第 () 班 班長 ()

2 スキット上演者 () ()
proverbの説明者 ()

3 選んだproverb名 ()

4 上演希望日 (どちらかに○をする)

6月20日 (金) 6月27日 (金)

- 189 -

7. First come, first served.
 8. Half a loaf is better than none.
 9. If you run after two hares you will catch neither.
 10. It takes two to make a quarrel.
 11. Kill two birds with one stone.
 12. Like father, like son.
 13. One man's meat is another man's poison.
 14. Out of sight, out of mind.
 15. So many countries, so many customs.
 16. Spare the rod and spoil the child.
 17. Speak of the devil (and in he walks)
 18. (There's) no smoke without fire.
-

生徒の上演日はALTとのチームティーチングの日を選び、当日学校訪問したアメリカ人の青年とともに、各グループの上演についてコメントをしてもらった。思った以上に盛り上がって熱演する班が相次いだ。上演が終了した後、各班にスキットのスクリプトを提出させた。以下に、二つの班のスクリプトを紹介する。原文通りで訂正は加えていない。

(例1 —“**Easy come, easy go.**”)

- A: Did you watch the horse race yesterday?
B: Yes, I did. I won the race and I got a lot of money.
A: Great! You should treat me.
B: Well, I lost all the money on the next race.
A: Oh, no! There is a saying “Easy come, easy go.”

Explanation

- C: “Easy come, easy go” means that you may lose something easily when you get it easily.

(例2 —**It never rains but it pours.**)

- Steve: Hi, Gomez. You look so sad. What's wrong?
Gomez: Hi, Steve. (そっけない感じで)。I dropped my contact lens this morning. It was very expensive.

Steve: Um, that's too bad. Oh, I almost forgot. Do you remember I borrowed 1,000 yen from you? Here, use this to buy a new one.

Gomez: Gee, thanks. (財布を取り出そうとするが、どこにもない。ゴメスはあわて始める)
Hey, where's my wallet? It's gone. I must have dropped it somewhere.

Steve: Again? Do you know a proverb that goes, "It never rains, but it pours"? You should be very careful.

Explanation

John: "It never rains but pours" means that things, especially unfortunate things, often happen in series. A Japanese proverb which has the same meaning is 「二度あることは三度ある。」

(2) ディベートについて

本校の研究大会の公開授業でディベートを行った。以下は、主としてディベートの意義と公開授業までの準備について述べる。なお、教育研究会の公開授業への取り組みと当日の授業の状況については、本紀要の拙稿「高校2年生のディベートの実践」を参考にして頂きたい。

a) 定義

ディベートとは、特定のトピックに対し、肯定、否定の二組に分かれて一定のルールのもとに、同じ持ち時間で立論・尋問・反駁・まとめを行い、相手や聴衆を説得する技術を競い、ジャッジが勝負を宣する競技としての討論である。

b) 指導目的

論理的な思考能力を伸ばし、インターパーソナルなコミュニケーション能力を発達させる。英語Ⅱ（高2の英語）は、4技能の総合的なコミュニケーション能力を伸ばすことが目的であるので、生徒の能力と将来のニーズを考慮して、ディベートを導入することを決断した。

c) 指導期間

10月の中旬から、11月の下旬までの一ヶ月あまり行った。

d) ディベートのテーマと指導手順

今回のディベートの論題（テーマ）は、「英語を大学入試からはずすべきである」"English should be removed from college entrance examinations." である。このテーマを選んだ理由は、生徒に大学入試における英語の試験の意義と問題点を問わせ、さらに入試の改革など広い視点を持たせたかったからである。教材として、英語を入試からはずす意見として、現多摩川大学学長

のGregory・Clark氏、平泉試案を提案した平泉渉氏、英語を入試からはずすのに反対の意見として、現明海大学教授で前の文部省教科調査官の和田稔氏の論文を使用した。

生徒を5人一組の肯定か否定のグループに分け、立論（1名）、尋問（2名以上）、反駁（2名）、まとめ（1名）の役割を決めさせ、グループでテーマについて討議させた。最初に立論の生徒に原稿（300語前後）を書かせ、原稿を提出させ内容をチェックした。（4クラス32班のうち、約半数の生徒が原稿を提出した。）時間の許す限り、立論の生徒に他の生徒の前でスピーチを行わせた。尋問以降の原稿は生徒に任せた。

e) 成果と課題

事前の準備が良かったグループはかなり充実した議論を展開した反面、準備が不十分だったグループは特に反駁で苦労していた。

立論を書いた生徒にはパラグラフライティングの書式に従って書くように指導したので、論理的に文章を書く練習になったと思われる。ただ、1／3程の生徒は、初稿の段階で理由の部分が先に来てポイントが後に来たので、聞いていると非常にポイントが捕らえにくいので、ポイントを先に書くように指導した。

ディベートでは自らスピーチを行うだけでなく、相手のスピーチや質問をよく聞いていなければならないので、スピーキングだけでなくリスニングの練習にもなった。他のグループのディベートを見て慣れたきたグループの中には、尋問や反駁で冗談など言って聴衆を笑わせたグループもあった。

今回のディベートの指導を通して、改めて発音やリスニングの指導の重要性を痛感した。この分野における継続的な指導の必要性を認識させられた。

（3）スピーチについて

3学期は教材として有名なスピーチや手記が収められている *Words to Remember*（桐原書店）を使用した。

3学期のスピーキングのテストとして、以下の条件でテストを行った。

- a) 題材は自分のオリジナルか、*Words to Remember* 中のスピーチ教材（Kennedy, Lincoln, Chaplin, Weizsacker等）とする。
- b) 原稿を見ないで、暗唱する。
- c) 長さは一分から一分半。

(生徒のスピーチの例ー原文通り)

Nagano Olympic Games

Nagano Olympic games are supported by the great number of volunteers mainly from local society.

Recently the commercialism in the games are getting more and more enlarged. Official sponsors that are world famous big company have entire monopolies of both selling their items in the game sites, and using the Olympic marks in their advertisement.

Nagano Olympic committee has collected very many people to work free for the games by using an attractive word "volunteers." On the other hand, local communities have given most of the man power, but they cannot get profit.

It is sure that today's Olympics are economically supported by the big sponsors. However, if local communities were not limited in using Olympic marks, Olympic games would be a movement which arose spontaneously from among the people.

3. 6. 3. 評価について

(1) スキットについて

評価は当日、私が Evaluation Sheet を用いて各グループごとに評価した。Evaluation の評価項目は、accuracy (正確さ)、fluency (流暢さ) と content (内容) で、A, B, Cの基準で評価した。小道具などを用いて熟演した班が多く、Cはほとんどつかなかった。A=5点、B=3点、C=2点として、期末考査の点数に加点した。

(2) ディベートについて

Debate Ballot (ディベート判定表ー資料12) を用いて、相互評価を行わせた。評価の点数は1～5点で1が最低点で、5が最高点である。肯定側と否定側の立論、反駁、まとめについてそれぞれ、次の3項目について評価させたー1. 分析と推論、2. 論拠、3. 話し方。肯定側と否定側の総計点を比較して、勝ち負けを競わせた。

(3) スピーチについて

オリジナルの原稿を用意したものは、全体の10%程であった。Mrs.Petersen と私で半分ずつ分担して評価を行った。評価は Accuracy と Fluency の両面で行い、A, B, Cの3段階で評価して期末の成績に加算した。

4. おわりに

以上、「スピーキング能力の評価」を中心に1997年度の実践を概観してきたが、いまだ首尾一貫性に欠けるという観は否めない。その原因として、(1) 音声という一過性のものを対象としていることや、ひとクラス41人をいかに公平に評価するか、など従来からいわれてきたスピーキング能力の測定・評価の技術的難しさが克服されていない点、(2) 各学年での到達目標や活動項目が6カ年を見通したシラバスとして確立されていない点、などがあげられる。

しかし(1)に関しては、生徒のパフォーマンスをビデオに撮ることで音声のみならず表情やジェスチャーといった総合的なコミュニケーション能力を記録に残す試み、ALTと共同の面接テストを行うことでテストをより実施しやすくし、かつ妥当性と信頼性を高める試み、日常の活動にワークシートに継続的に記録・保存することで生徒の習得過程を観察する試み、などがあった。それぞれに効果のあったことが報告されている。また、97年度の実践を通して、①パフォーマンステストは事前に評価の観点を明らかにすることで、生徒になにをがんばればよいか意識させる、②適切なフィードバックを返すことで次の取り組みにつなげていく、という2点がパフォーマンステストののぞましいありかたとして確認された。

(2)の問題に関しては、98年度より英語科として、中高6年間のシラバスをリスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの技能別に作るというプロジェクトに、5カ年計画で取り組み始めている。シラバス作りとはすなわち、到達目標・活動項目・評価方法等を総合的に記述していくことであるから、評価方法の研究は今後も継続して行われるわけである。テストについて「まず妥当性の高いテストを作りその信頼性を高める方法を確立する」(Heaton 1988)のがよいとされるが、日常的に授業でおこなう活動と、まとまった時間をかけておこなう活動の両面を視野に入れ、より妥当性・信頼性・実用性に富む評価方法を追求していきたい。

<参考文献>

青木常雄 (1933)『英文朗読法大意』 リーベル出版<復刻:1987>

Council of Europe (1998) *Threshold 1990 (Revized and corrected edition)*, Cambridge University Press

[米山朝二・松澤伸二訳 (1998)『新しい英語教育への指針-中級学習者レベル<指導要領>』大修館書店]

Department for Education and Welsh Office Education Department (1995) *Modern Foreign Languages in the National Curriculum*, London: HMSO

石井光太郎他 (1997)「三年間を見通した英語指導〜『聞くこと』『話すこと』を中心として〜<第二年次>」『第25回研究協議会発表要項』 筑波大学附属中学校

Heaton, J.B. (1988) *Writing English Language Tests -New Edition*. Longman.

- [語学教育研究所研究グループ訳 (1991)『コミュニカティブ・テストィングー英語テストの作り方ー』研究社]
- 梶田毅一 (1987)『現代教育評価論』 金子書房
- 小菅敦子他 (1996)『英語科カリキュラム1996』 東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校英語科
- 隈部直光 (1996)『英語教師心得のすべて』 開拓社
- 久保野雅史 (1997)「スピーチ指導の改善ー聞き手に優しいスピーチを目指してー」
『英語教育研究 (FELT)』第13巻, (財) 語学教育研究所
- 久保野雅史 (1998a)「英語の授業と基礎基本」『指導と評価』1998年9月号 (第44巻9号), (社) 日本図書文化協会・日本教育評価研究会
- 久保野雅史 (1998b)「スピーチ指導・評価の小道具・大道具」『1998年度研究大会プログラム・資料集』 (財) 語学教育研究所
- 久保野雅史他 (1998)「コミュニケーション能力の評価ー評価法の改善をめざして (2) ー」
『筑波大学附属駒場中・高等学校 研究報告・第37集』
- 久保野雅史・谷口幸夫 (1998)「中高一貫の特性を活かした音声指導 (2) ースピーキング能力の育成を中心にー」 『第40回高等学校教育研究大会・大会要項』
全国国立大学附属学校連盟 (全附連) 高等学校部会
- 教育課程審議会 (1998)『教育課程の基準の基本方向について (審議のまとめ)』 文部省
- Livingstone, Carol (1983) *Role Play in Language Learning*, Longman
- 文部省 (1989)『中学校・学習指導要領』 大蔵省印刷局
- 文部省 (1989)『高等学校・学習指導要領』 大蔵省印刷局
- 文部省 (1992)『高等学校外国語指導資料・英語を聞くこと及び話すことの指導ー指導計画の作成と学習指導の工夫ー』 学校図書株式会社
- 鈴木文子他 (1994)「中高一貫教育におけるオーラル・コミュニケーション能力の育成を目指した実証的研究とカリキュラム編成 (1)」『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告・第33集』
- 吉田研作 (1998)「スピーキング力をつける指導のポイント」 The Eiken Times 7月号別冊
(財) 英語検定協会

<資料1>

中2英語 パフォーマンス・テスト課題

今学期は、新しい表現として「比較表現」を中心に学びました。そこで、実際に比較表現を用いて人物や、建物、動物などを紹介する、というのを課題にしたいと思います。

(例)

This is Ayres Rock. It is the biggest rock in the world.
It is 345 meters high -- it's higher than Tokyo Tower!
It has a lot of caves and inside the caves, you can see
beautiful paintings. Who painted them? The Aborigines did.
Actually Ayres Rock is a holy place for the Aborigines.
They call the rock "Ururu" and this name is becoming more popular now.
I am going to visit this rock in the future.

* 最初に「1番～」と言っておいて、その後でその根拠を述べる。そしてプラスアルファの情報をつけ加える。

* 別にあまり堅苦しくとらえる必要はない。世界一や、日本一を見つけるのは難しいがある地域に限定することで、「一番～」ということが可能。また、one of the ...est ということなので「一番～の1つ」として、必ずしも一番でなくても表現することができる。これは、コマーシャルなどでもよく使われる手法。つまり、何かを宣伝する、ということを考えてもいい（例えば、自分の住んでいる町）。

Kunitachi is one of the most beautiful cities in Tokyo. (以下に、その理由を挙げる)

* 具体的な写真や地図が用意できる方が良い（前日までなら、拡大コピーも可）

* 前回の参考資料

<資料3>

中2英語・1学期パフォーマンステスト 個人表 ____組____番

発音・視線 (原稿の暗記等)	内容	発表の工夫(絵などの活用)	一言コメント

<資料2>

東京都 筑波大学附属駒場中学校 2-A (130語) 班

「There is problem
of environment on the earth.」

~in the UFO~

A: We have three straight holidays from today.

B: How about going to Jupiter?

C: We went there last week. Going to Mercury is better than that, isn't it?

B: It is bad because Mercury is very hot.

A: How about going to Mars?

B&C: That's a good idea! I agree to your plan!

.....
A: Oh, no! We are running out of oxygen.

B: Shall we drop by at the earth?

C: Yes, Let's.

~on the earth~

B: Ah! The air smells bad on the earth.

C: Maybe it's dioxin mixed with air.

A: There are a lot of problems on the earth. They are all because of
human beings.

B&C: Because of human beings? How stupid!

B: I'll eat them!

C: Don't eat.

A: But now, human beings become more concerned with those problems.

B: Will human beings be able to settle the problems from now?

C: Well, it depends on their effort.

<資料4>

Who Developed the Modern Alphabet?

1. There are _____ in it.
2. They began as a simplified version of ancient _____ of _____ objects and _____.
3. They are Egyptian signs and _____ where each picture stood for a complete _____.
4. Because it was _____.
5. It was an alphabet in which only _____ Each symbol represented _____ and several were combined to make _____.
6. It was _____.
7. It lacked _____ which _____ added.
8. There were _____ in _____ alphabet.
9. The _____ did.
10. They added the letters _____ making the _____ alphabet.

1 26 letters

2 drawings/animals / signs

3 pictures/ word or a syllable 音节

4 too slow for the business world

5 symbols were used / one sound / one word

6 adopted in 800 BC

7 vowel sound / the Greek

8 24 letter alphabet / the Greek

9 Romans

10 V and J / 26 letter

<資料5>

1. How Did Names Begin?

They originated when early humans used specific cries and sounds to identify themselves.

2. When Were Knives, Forks, and Spoons First Used?

Knives and spoons have been used from the time that cavemen began hunting.

Forks were introduced in 1100 in Italy.

3. Who Developed the Modern Alphabet?

The Romans did.

4. When Did Books First Appear?

They were used about 3500 B.C.

in Mesopotamia.

<資料6>

Declaration of Independence (4)

What Jefferson strongly believed

① all people _____
nobody should _____

② there were some rights that could not be taken away



(1) the right to ()

(2) the right to ()

to be free to ()

to ()

as long as his actions _____

(3) the right to ()

(4) the right to ()

<資料7>

1. Protection 1897 ~ 1930
各州にて。アボリジニをみじめな生活がけう。

The belief was that aboriginal people were going to die out.

2. Assimilation (同化・融合) 1930 ~ 1971
アボリジニが絶滅しないようなので。

Purpose of assimilation policies was to make
purpose
aboriginal people just like Europeans.

3. Self-Determination 1972 — (on going)

Aboriginal people could run their own organizations.

<資料9>

8. 難病と闘いながら広大な宇宙の謎に挑戦し続けるホーキングの姿に深く感動した人も多いかと思います。彼の生き方を思い起こしながら、読後の感想を書いてみなさい。

I think him strong person. If I got ALS, I would do nothing. Dr. Hawking studied hard and has produced one revolutionary theory after another.

I can not believe he has the incurable disease because he lives normally.

I want to study hard as Dr. Hawking and I want to know a lot of new things.

— “ROOM FOR ONE MORE” —

(自分なりに) あらすじをまとめる。(目標200~250語)

A girl student was on her way home from the university. she got off the train about half-way to spend the night with an old friend in Newcastle.

The two young girls were delighted to see, and had lots of talk.

It was a very old house on the outskirts of the city.

She felt so sleep after her long journey and gossip, so she undressed quickly. Before go to bed, she looked out of the window.

She heard the sound of horse's hooves and carriage wheels coming down the dark lane.

She was horrified to see a big black hearse draw by six horses.

It was driven by a coachman who had skeleton hands. And he said "There's room for one more!!"

Next morning, they went shopping in the city. They enjoyed it and they went to restaurant on the top floor. After lunch, they walked to the lift to go down to the ground floor.

The lift was crowded, but her friend told to squeeze in some how before they entered it, the liftman said "Room for one more!!"

To her horror, she pulled back her friend. And she saw the liftman's hand was a skeleton's hand. The lift started, and suddenly they heard the most terrible crash — the lift plunged to the bottom of the shaft, the people in the lift were all killed!!

(227語)

Hang In There!

MAGICAL QUIZ			EASY LISTENING					
			1	2	3	4	5	TOTAL
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								
TOTAL								

Class _____ No. _____ Name _____

<資料11>

1-4

-
1. 万里の長城 the Great Wall (of China)
2. 自由の女神像 the Statue of Liberty

- ① Yesterday, the team Yokohama won by five points. (T)
② We will play soccer tomorrow. (T)
③ There is no women in our school. (F)
④ Today I had a speech in second class. (T)
⑤ There are eight planets travelling around the sun. (F)
9個

<資料 1 2>

Debate Ballot (ディベート判定表)

Date:

Proposition:

All judges are asked to rate debaters on each item using a 5-point scale:

1-poor 2-fair 3-average 4-good 5-excellent

C: Constructive Speech R1: Rebuttal 1 R2: Rebuttal 2

(Debaters in the Cross-Examination are not rated.)

Affirmative Team	Total ()			
	Aff. C	Aff. R1	Aff. R2	Aff. Summary
1. Analysis and reasoning (分析と推論)	()	()	()	()
2. Evidence (論拠)	()	()	()	()
3. Delivery (話し方)	()	()	()	()
Total Points (総計点)	()	()	()	()

Negative Team	Total ()			
	Neg. C	Neg. R1	Neg. R2	Neg. Summary
1. Analysis and reasoning (分析と推論)	()	()	()	()
2. Evidence (論拠)	()	()	()	()
3. Delivery (話し方)	()	()	()	()
Total Points (総計点)	()	()	()	()

In my opinion, this debate was won by the () Team.

(Aff. or Neg.)

Judge: _____

(Signature)